國學院大學学術情報リポジトリ

記憶の中のサン=ジュスト

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安倍, 住雄, Abe, Sumio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000007

記憶の中のサン＝ジュスト

安部住雄

I

議会を取り囲む八万人の武装したサン・キュロットの圧力の前に、国民公会がジロンド派の中心議員二十九名と大臣二名の逮捕を決議し、前年九月以来の山岳派との対立に終止符が打たれたのは、一七九三年六月二日の夜半である。事態の推移を受けて、七月一〇日には公安委員会が刷新され、バレール、クートン、ガスパラン、エロー・ド・セシェル、ロベール・ランデ、プリュール・ド・ラ・マルヌ、サン＝タンドレ、サン＝ジュスト、チュリオの九名が選出され、従来の一カ月任期制も廃された。以後、キュスチーヌの逮捕に抗議して辞任したガスパランに代わってロベスピエールが七月二七日に委員となり、八月一四日カルノーとプリュール・ド・ラ・コート・ドールが軍事専門家として、さらに九月六日にはビヨー＝ヴァレンヌとコロー・デルボワが委員に加わった。同二〇日ダントン派のチュリオが孤立して辞任、最終的には十二名が共和暦第二年の公安委員会を構成し、山岳派独裁を担うことになる。

四月二四日の国民公会で、ジロンド派のコンドルセ案に対抗して新憲法について演説し、また新憲法でパリをいくつかの市

に分割してその力を削ごうとするジロンド派の意図を五月二四日の演説で反駁した後、新憲法案作成を担当する委員として実質的に公安委員会の一員に加わっていたサン＝ジュストが、刷新された委員会に選出されるのは当然のことだった。すでに選出二日前の七月八日には、ジロンド派議員三十二名について「公安委員会の名において」告発演説を行っているのである。

こうしてチュイルリー宮の一角、パヴィヨン・ド・フロールに置かれた公安委員会で、彼の短い後半生が始まる。テルミドール一〇日までわずかあと一年を残すのみである。審議が非公開とされたため全貌は明確ではないが、ヴァンデの乱をはじめ各地に頻発する叛乱、イギリスも加わった同盟軍の攻撃にほぼすべての国境線で敗退と後退が相次ぎ、危機的状況に陥っていたこの時期に、外交、軍事、行政全般を管轄した公安委員会は多忙を極めた。委員が職務を分担し、数多くの補佐役もいたとはいえ、この小人数である。日々六十を超える通達、指令を出し、仕事は一日十五時間から十八時間におよんだ。サン＝ジュストの場合で言えば、この間、日常的な業務以外に、国民公会における委員会報告、「平和の到来までフランス政府は革命的である」と宣言した一〇月一〇日の報告をはじめ、テルミドール九日の壇上で中断された報告まで、主要な公安委員会報告の大半を担当し、ライン軍（一〇月～一二月）と北部軍（九四年一月～二月、四月～五月、六月）に派遣議員として赴き、また二月から三月にかけては国民公会の議長をつとめたのだった。

しかも山岳派独裁、あるいは恐怖政と言われるが公安委員会は俗に言う一党独裁、一枚岩からはほど遠い。明確にロベスピエール派と言えるのは本人とサン＝ジュスト、クートンの三名にすぎない。当然、公安委員会内部ではことあるごとに激論が繰り拡げられた。事情は彼らが報告の義務を持つ国民公会でも同様であった。党派とはいえ綱領もなければ所属も明確ではない。しかも多数は帰趨定まらぬ平原派が占める。

そうした激動のさ中、国民公会、公安委員会、ジャコバン・クラブで、あるいは派遣議員としての最前線で、サン＝ジュストは時間をともにした者たちの脳裏にどう刻まれ、記憶の中にどう残り語られているのか。どのような経緯であれ、記憶を語る彼らはテルミドールの「生き残り」である。はるかに時を隔てて記憶に蘇るサン＝ジュスト像には当然、毀誉褒貶、虚実とり混ぜて歪みがある。それでも、逆に長い時間を経たからこそそれは彼らにとっての実像でもある。彼らの語るままにサン＝ジュストを見てみよう。

Ⅱ

ベルトラン・バレール（一七五五～一八四一）は、中間派である平原派からただ一人公安委員に選ばれ、対立する議論の中でいわば調整役をつとめてロベスピエールに協力し、鍵となる位置を占めて恐怖政治を推進しながら、テルミドール九日、ぎりぎりでロベスピエール弾劾にまわった。その後逮捕、追放を含め波瀾に満ちた生涯を送って七月王政下まで生き延びた。公安委員会でもサン＝ジュストを身近でつぶさに見ていた彼が書き遺した『回想録』で、彼は「私はサン＝ジュストについて、また彼の天分について語ることができる」として、次のように述べる。「彼には類いまれな才能と鼻持ちならない傲慢さがあった」「彼が見せた人民の愛し方は、おそらく彼の祖国にも、彼の世紀にも、彼と同時代の者たちにもふさわしいものではなかった。（…）だが少なくとも彼は、フランスに、そして十八世紀に、才能と性格と共和主義の強烈な痕跡を残したのだ」「サン＝ジュストの精神を際立たせているのは大胆さである。革命の秘密は〈敢行せよ〉と言う言葉の中にある、とまっ先に言ったのは彼である。そして彼は敢行した。革命家の休息は墓の中にある、と言ったのも彼である。そして二十七才（ママ）にして彼は墓へ下った」「国民公会における彼の報告について、みなまるで斧のような語り口だと言ったものだ」。

バレールは「サン＝ジュストは原理については透徹した精神の持ち主だったが、こと人間についてはその判断はあまり成熟していなかった」と批判し、ライン軍派遣議員当時のランダウ解放の立役者、オッシュ将軍との確執を挙げている。また、北部軍派遣議員としてサン＝ジュストが歴史を劃した九四年六月二六日のフルーリュスの戦いに立会いながら、なぜか国民公会で報告することを執拗に拒んだことに触れて、バレールは、軍が自由にたいし影響を及ぼす事態をサン＝ジュストが懸念していたのではないかと推測し、革命軍のアントワープ奪取の報が届いた晩のこととして、次のような二人の会話を記している。「出しなにサン＝ジュストは私に言った。〈勝ったことを吹聴しすぎないことだな〉〈なぜだ？きみは軍を恐れたことなんて一度もないじゃないか〉〈うん、一度もね。文民の権力がしっかり統治できているときには〉」翌日、バレールは国民公会で報告を行う。アントワープ奪取が七月二四日、このバレールの報告は二六日、翌二七日はテルミドール九日である。サン＝ジュストは何を言おうとしたのか。

サン＝ジュストが四度にわたり派遣議員として赴いたライン軍、北部軍は、当時オーストリア、プロシア連合軍の攻勢の前に危機的な状況にあったが、彼は時に強権を振るって軍の規律を正し、装備糧秣などを確保して後方支援態勢を整え、戦線を立て直すことでランダウ解放、フルーリュスの勝利につなげた。サン＝ジュスト神話形成の基本方位の正の極として、負の極の若き日の奔放な行動の対極に置かれる出来事である。

その北部軍に同じ派遣議員として赴き、前線のサン＝ジュストと行動をともにしたおりの経験を語るのがルネ・ルヴァッスール（一七四七～一八三四）である。ロベスピエールの心酔者でジロンド派を激しく攻撃したこともある彼だが、かならずしもロベスピエールからは信頼されていなかったようである。テルミドールには派遣議員として不在だったが、以後もジェルミナール蜂起の嫌疑で投獄されるなどテルミドール派に与することはなかった。彼もまた晩年回想録を著して、サン＝ジュストとロベスピエールの関係をこう述べる。

「サン＝ジュストは国民公会のただ中でロベスピエールと友情で結ばれていた。この友情は二人の死によってようやく消えることになったのだが、驚くほどの見解の一致と、興奮しても冷静を失わずエネルギッシュなほどに粘り強いという二人に共通した性格が、この友情を揺るぎないものとしていた。（…）一方が自由について語ると一方は力を要求し、片方が理論に走ると片方はどう適用するかに踏み込む」。サン＝ジュストの演説を「原理を語る簡明で力強い言葉、祖国への愛と真実への愛が輝くこの言葉」と最大限に称えながら、あるいは嫉妬心が働いたのか、前線のサン＝ジュストについて次のようなエピソードを書きつけている。

「私は敵陣を見晴らせる丘に向かった。サン＝ジュストが同道していた。敵が銃砲に点火するのが手に取るように見えた。私は同僚に言った、〈議員ともあろう者が戦いからこんなに離れたところで見ているべきではないんじゃないか？戦闘に駆けつけよう〉〈どうしてあんなところまで行きたいのかね？〉この返事はそばにいた将校たちの笑みを誘った。私はかっとなってサン＝ジュストに皮肉を言った。〈どうやら火薬の臭いがお嫌いらしいな〉馬に拍車をくれ私は彼のもとを離れた」。翌日のこととして彼は次のような逸話も伝えている。手紙を書いているとサン＝ジュストが部屋にやって来て、書き終えるのを待ちながらルヴァッスールの銃を手に取りもて遊んでいた。ところが弾がこめてあった銃が暴発し、すぐそばの外套掛けを打ち

抜いてしまう。「慌てて立ち上がると、サン＝ジュストの手から銃が落ち、蒼ざめよろめきながら私に抱きつき、憑かれたように言った。〈ああ、ルヴァッスール、もし君を殺してしまっていたら〉〈ひどい悪さをしたことになっただろうよ。私が銃弾で死ななければならないとしたら、せめて敵の手から撃たれたものであってほしいね〉」銃声を聞きつけ駆け入ってきた将校たちが、ルヴァッスールの腕の中で死にそう蒼ざめているサン＝ジュストの姿を見て怪訝な顔をしたため、誤解のないように事情を説明した、と。戦場のことである、実際にあったとしても一向におかしくない事故だが、ルヴァッスールの語り口には、前日の話と合わせ、乱戦の中みずから先頭に立って兵士に手本を示したという神話を、臆病者サン＝ジュストの像で貶めようという意図が見え隠れしている。

しかしそのルヴァッスールも、革命の推移を間近で見てきた経験からこう吐露するのである。「あえてほぼ断言していいと思うが、サン＝ジュストのほうがロベスピエールその人よりも革命政府に寄与するところ大であった。国民公会で最年少であったにもかかわらず、これ以上ない強烈な熱狂、迅速確実な判断力にくわえ、誰にも勝る不屈の意思、卓越した組織者としての才を併せもった議員であった」と述べ、「彼に意見を変えさせることなどけっしてできなかったし、決断を曲げさせることができたためしもない。（…）ずっと以前から夢見てきた共和国を樹ち立てるためとあらば、彼は自分の首を、それとともに十万の首を差し出しただろう」と。

サン＝ジュストと同僚のルバがストラスブールで矢継ぎ早に布告を出し、軍の規律と市の秩序の回復にとりかかっていた一一月三日、国民公会は公安委員会バレールの報告を受けて新たに四人の議員をライン、モーゼル両軍に派遣することを決議した。「すでに派遣されている議員と同等の権限を持って」。公安委員会内部に亀裂が生じている証拠である。「辛抱するように、われわれは二人を支持している」、ロベスピエールとカルノーは二人への通達書にわざわざこう書き添えている。当然のことながらこの新たな派遣議員との間には、しばしば軋轢が生じた。とくにビシュグリとオッシュの両将軍をめぐってサン＝ジュストと対立したのがマルク＝アントワーヌ・ボード（一七六五～一八三七）であった。たまたま休暇中であったため彼はテルミドールの騒擾にかかわっていない。彼もまた数度の亡命と帰国を繰り返す中で覚書を書き遺した。

その中で、サン＝ジュストがパリにいるときには、連日ガトー

の家で愛人と夕食をともにし、ガトーにも愛人がいたというはなはだ怪しい話を、ボードは書き留めている。ガトーはサン＝ジュストがランスの法学校時代に知り合い、国民公会議員としてパリに出た彼の誘いで軍の糧秣管理官をつとめ、ライン軍、北部軍にも同道したサン＝ジュストにとって数少ない友人の一人である。テルミドール後投獄され、その獄中でブレランクール時代のサン＝ジュストについて貴重な手記を残し、また一八〇〇年に初めて出版されたサン＝ジュストの遺稿『共和制度論断片』の「前書き」は、彼の手になるとされている。ガトーと派遣議員時代によほど対立したらしく、ボードは、サン＝ジュストは寡黙だがガトーはおしゃべりで意地が悪く、サン＝ジュストのおかげで得た権力を鼻にかけた彼に親密感を抱いたことなどまったくない、などさんざんにこきおろしている。さらに「一度も会ったことのないこのサン＝ジュストの愛人が（…）私がかねがねあるのではないかと疑いつつも確証できなかった、サン＝ジュストに敵意を抱いている人物のリストに私が載っていると知らせてよこした。この当時サン＝ジュストに敵意をもたれるとは死刑とマッタクオナジ（ウーヌム・エット・イデム）だった。私は自分のため、またほかの連中のためこの知らせを活用した」。世間に飛び交う噂話から作り上げたものか、悪意に満ちた真偽を確かめようもない話を書き綴る一方で、軍で激しく対立したサン＝ジュストについて、ボードはルヴァッスールの記述を手厳しく批判している。

「ルヴァッスールは機会を捉えては、彼個人の勇気を大げさに語って自賛し、サン＝ジュストの価値については侮蔑的な口調で述べている。ルヴァッスールの勇気についてはまあよしとしよう。しかしサン＝ジュストの勇気にたいしては、彼の描いて見せた場面の配置には誤りないし思惑がある。休戦交渉に訪れた敵の軍使を塹壕に迎え、降伏するについて二十四時間の猶予を軍使が求めたのにたいし、サン＝ジュストはこう答えたらしい。〈貴殿は、ヨーロッパのすべての国に代わって交渉する任を帯びているのかね？兵士たち、砲撃を続けよ！〉ここには勇気欠けるところはまったくない。私も彼の姿を軍で見かけたが、そのようなことはまったく見ていない。しかも、サン＝ジュストは見事なほどストイックに平静を保って死んだ。そして最期の瞬間まで冷静で動じることのない勇気を見せた。ルヴァッスールに同じような証拠を見せよ、とは言うまい。しかし自分の勇気を際立たせようというなら彼はもっと相手を選んだほうがよかったかもしない。私の証言に疑わしいところはない、なにしろ私がサン＝ジュストを好きどころではないのは間違いな

いのだから」。

ピエール・パガネル（一七四五〜一八二六）は元聖職者で民事基本法の宣誓拒否僧たちを激しく攻撃した議員である。政治的去就が定まらない議員だが、だからこそ時代の激流を無事泳ぎぬいたようにも見える。彼の覚書にはサン＝ジュストの容姿がこう書かれている。「中肉中背で体は健康、力のみなぎったプロポーション、頭が大きく髪は豊か、顔色は黄色を帯び、生き生きとした目は小さい、人をばかにしたような目つき、整った顔立ちで冷ややかな表情、声は力強いがくぐもっている、どこかしら不安げな様相、気がかりや猜疑がにじむ沈んだ口調、話しぶりでも物腰でも極端なまでに冷ややか、サン＝ジュストはこのような姿でわれわれの前に現れたのだった、まだ三十にもならない歳で」。われわれに残されたダヴィッド、プリュドン、グルーズらの肖像画、あるいは無名の女性の手になるパステル画と比べてはたしてどうか。それとともに彼はこうも書く。「共和国が砕け散ってしまう暗礁に、サン＝ジュストははるか手前から注意を促していた。世論であれ民衆の党派であれ、それを指揮する任を引き受けるにはどれほど代償が必要か、彼は知っていた。最後の嵐のさ中でも死が彼を動揺させることはなかった。六十時間もの間、最後の時が彼の眼の前にあった。しかし、そのほんの少し前まで国民公会と共和国に死を連れまわっていたこの若者の表情に、かすかな変化も見て取ることはできなかった。彼は処刑に刃向かうことなく、日々の仕事に向かうかのように死へと歩を進めた」。

サン＝ジュストの死、演説については、フーシェ、タリアンとならぶテルミドールの立役者ポール・バラス（一七五五〜一八二九）の回想を挙げないわけにはいかないだろう。総裁政府を主導しその腐敗ぶりから「悪徳の士」の名を恣にしたバラスは、テルミドール九日演説を遮られた後のサン＝ジュストの姿を「（壇上で）微動だにせず、動じる気配もなく、びくともせずに平然とすべてに立ち向かっているようだった」と追想し、またダントンを告発したサン＝ジュストの演説について、「それはおよそ想像しうる限りもっともおぞましい、もっとも奇妙なものだった。この信じがたい論題を、しかつめらしく淡々と彼は読み上げていく。片手にじっと原稿をつかみ、もう一方の手、右腕を振り上げては、まるでギロチンの刃のように冷酷に有無を言わせぬ調子で振り下ろす仕草を繰り返しながら。サン＝ジュストのこの報告の朗読は、三十年以上の歳月が流れた今

となっても、私を困惑させ、息苦しくさせるのである」。脛に傷もつ彼らのことである。演説のギロチンの刃がわが身に向けられる恐怖が、彼らをしてテルミドールに走らせたのだった。

Ⅲ

作家シャルル・ノディエ（一七八〇～一八四四）がサン＝ジュストに会ったのは、一七九三年の秋ストラスブールでのことである。ギリシア語を学ぶために生まれ故郷のブザンソンから単身やって来た十三才の少年は、このライン戦線最前線の町で逮捕され、当時派遣議員として軍と市政の立て直しに全権を振るっていたサン＝ジュストの前に出頭したのだった。彼はその遠い少年の日の経験をのちに詳しく記している。

「彼の執務室に入るときには、心臓は激しく波打ち、手足は今にもくずおれそうだった」。サン＝ジュストは鏡の前で「例の大きな幅広のネクタイのしわをたんねんに整えていた」。待つ間ノディエは不安にさいなまれながらも、燭台の灯りを受けて鏡に映る「私の運命を決める至高の裁判官」の容貌を盗み見、観察する。彼の顔立ちは石版画から受ける、整った目鼻立ちが優雅に組み合わさった印象とはちがっていた。「革命の活動家たちのほとんどと同様に、おそらく苛烈な徹夜仕事と厳しい精神集中の影響からくる蒼白い顔色」、そしてなによりも「ほとんど抑えられない懶惰と逸楽の性向を示すふっくらとした厚い唇」。言うまでもなく彼の描写には、サン＝ジュストの若き日の放埒な行状と長編詩『オルガン』が逆投影されている。容貌もさることながら、特筆すべきはその仕事ぶりが描かれていることであろう。身づくろいの後、なおも少年には見向きもせず彼は仕事にとりかかる。ぶっきらぼうにあまりの早口で口述するので、筆記する者が紙を補充するのがやっとで、しかもそこにはあらゆる考えが一気に流し込まれていく。原稿が一ダースほどたまると次々に別の部屋でドイツ語に訳され（アルザスは当時ほとんどの住民がドイツ語である）、すみやかに印刷所に送られて二段組みで刷り上がると、まだインクの乾かぬうちに掲示係のもとに配られるなど興味はつきない。ようやくノディエは逮捕の理由、名前、郷里、年齢と矢継ぎ早に訊かれる。「この最後の質問に答えると彼はだしぬけに私に駆け寄り、腕をつかんで灯りの近くに引っ張っていった。〈確かに〉と彼、〈せいぜい十一か十二だな。まるで女の子みたいだ〉」「〈子どもに逮捕状とは！〉書類をしわくちゃに丸めながらサン＝ジュストは叫んだ」。ノディエの疑いは晴れて釈放されるのだが、出しな

に、ストラスブールに何をしにと問われ、ギリシア語の勉強にと答えたノディエに、彼はこう言う。「ギリシア語か！ドイツ語の勉強に来るというほうがもっと自然に思えるがね。それにギリシア語がなんになるのかね？ラケダイモン人たちは書くことはしなかったんだから」と。ノディエの脳裏には、この恐怖と興味が織り交ざったサン＝ジュストとの会見が忘れがたい記憶として刻み込まれた。

このやり取りの中でギリシア語の教師の名を問われて、ノディエがウーロージュ・シュネーデルの名を挙げたところ、サン＝ジュストは皮肉と苦々しさの混じった笑みを浮かべる。このシュネーデル（ドイツ名ヨハン・ゲオルク・シュナイダー）は、かつてアナクレオンの訳で盛名を馳せた碩学の聖職者から、フランス革命に心酔してストラスブールで「プロパガンダ」なる最左派を組織し、また革命裁判所検察官となってアルザス一帯で移動ギロチンの刃をまわし続ける革命家となっていた。当然のことながらノディエはギリシア語どころではなく、会ってもシュネーデルの口からは政治話が出るばかりであったが、そのシュネーデルの傍若無人な振る舞いがサン＝ジュストの逆鱗に触れ、逮捕されてギロチンの台上に四時間晒し者にされた挙句パリに送られた一部始終を目撃することになる。少年の日の記憶であるから日づけなどに間違いはあるが、シュネーデルについてサン＝ジュストがノディエに述べた言葉、ノディエが聞かされたシュネーデルたちの政治話を併せると、サン＝ジュストがシュネーデルを手先としてストラスブールにギロチンによる恐怖政を敷いたという俗論が誤りであることは明らであろう。

Ⅳ

国民公会にほど近いサン・トノレ通りの指物師の親方モーリス・デュプレは、妻と五人の子供、十人の職人を抱え、三軒の家作をもつ典型的なパリのプチ・ブルジョワである。彼はまた足しげくジャコバン・クラブに通う革命派の市民でもあった。その彼が歴史に名を残すことになるのは、独身のロベスピエールがここを寄宿先としたことによる。国民公会、公安委員会をのぞけば、サン＝ジュストがパリでもっとも足を運んだのはおそらくこの場所である。そのデュプレの四人姉妹の末娘エリザベートが、九三年八月、大恋愛の末に結婚した相手がパ・ド・カレー県選出の国民公会議員、フィリップ・ルバ（一七六四～一七九四）であった。ルバは当初ジロンド派に近い立場をとったが、やがて山岳派に合流し、とりわけロベスピエールに傾倒

するとともに、年齢も近いサン＝ジュストと友情と信頼で結ばれた数少ない人物である。テルミドール九日国民公会の壇上で演説を遮られたサン＝ジュストが、ロベスピエールとクートンとともに逮捕されたとき、運命をともにすることを望んでロベスピエール弟とともにルバは自らの逮捕を要求した。いったんは市当局の手で牢獄から解放されたものの、騒擾の中でロベスピエールが撃たれるや、ルバも忠誠を貫きピストルで自殺したのだった。

ルバは結婚後ほどなく保安委員会委員に選ばれるが、わずか一年にも満たないその後の月日の多くを、ライン軍、最後を除く二度の北部軍への派遣議員としてサン＝ジュストとともに過ごした。その間ルバはパリに残した身重の妻の身を案じ、また後述するように妻を同行した場合も、激務の暇をみつけてはこまめに手紙を出し、それが公務とは別のサン＝ジュストの「現在形」の素顔を垣間見させる、他に類のない証言となっている。さらにエリザベートはテルミドール後、生まれて間もない幼児を抱え、他のデュプレ一家と同様投獄され苦難の生活を強いられたが、テルミドール九日の夜最後に出会った夫の言葉を守り、ルバとサン＝ジュストへの敬愛の念をたえず語ってルバの忘れ形見を育てた。ちなみにこのルバの遺児が、スイス亡命中の少年ルイ＝ナポレオン・ボナパルト、のちの皇帝ナポレオン三世の家庭教師を七年にわたりつとめ多大の影響を与えたフィリップ・ルバである。エリザベートはその後ルバの弟と再婚して平穏な後半生を過ごし、一八五九年に六十三才の生涯を閉じたが、彼女自身も手稿を残し、サン・トノレ通りのデュプレ家の生活、うちとけたロベスピールの姿、アルザスへの旅の途次のサン＝ジュストについて貴重な証言を伝えている。

サン＝ジュストとルバがライン軍に派遣されパリを後にしたのは一〇月一八日、ストラスブールに着いた時状況は危機的であった。フランス軍は四分五裂、指揮官、規律、食料、装備弾薬すべてが欠乏し、フランス語もろくに通じないこの地方では、国民公会の法律も死文に近い。到着後ただちに通達を矢継ぎ早に出して、二人は軍および市政の抜本的改革に着手するのだが、ここではもっぱらノディエが記憶した公務の中のサン＝ジュストとは別の顔を、ルバとエリザベートの証言からできるだけ拾い出しておこう。

ルバが選ばれた理由について「ロベスピエールはルバをたいそう信頼していた。というのも、慎重で思慮深い彼の性格を熟知していたからで、そこで彼を選んでサン＝ジュストと一緒に行かせた。熱烈な祖国愛がサン＝ジュストを過剰なまでの厳し

さに走らせることがままあり、その性格に激情に駆られるという難点があったのだ」と、エリザベートは書き綴っている。当のルバは「ぼくはサン＝ジュストにとても満足している。彼の才能には感服するし、すばらしい資質の持ち主だ」（一一月一日）もっとも興味深い意外な出来事が書かれているのは一一月二八日づけの長文の手紙である。いつものように一刻も早く会いたいとエリザベートへの思いを書きつづった後、「ぼくがいる地方はすばらしいところだ。これほど美しくてこれほど壮麗な自然はよそで見たことがない。聳え立つ山々が連なって、変化に富んだ風景に眼も心もうっとりとする。今朝ぼくとサン＝ジュストはいちばん高い山の一つを訪れた。頂上には大きな岩の上に廃墟になった古い砦があった。目をぐるり四方に走らせてぼくらは二人とも甘美な感情を覚えた、ぼくらにとってはこれが初めての休息日だった」と。いかにも十八世紀末らしい行動と感性の発現である。さらにランダウの解放はもう間近く、そうすれは任務は終わってパリに戻れると手紙は続いて、「ぼくは彼にきみの手料理を食べさせると約束した。きみもその気になってくれればうれしい。あれはすばらしい人物だ。日を追うごとにぼくはますます彼のことが好きになるし評価も高まるばかりだ。共和国は彼以上に熱烈で頭の切れる護り手をもたない」と、手放しでサン＝ジュストを称える。

十二月初旬いったんパリに戻った後、二人は再びライン戦線へ出発する。おそらくこの間にランダウ解放に向けた作戦の確認と、エベール派対策ともからみシュネーデルとプロパガンダ派への対処が協議されたものと思われる。一二月一二日深更にストラスブールに着いた二人は翌朝にはシュネーデルを逮捕している。ところで今回は、ルバの妻エリザベートと妹アンリエットが二人に同道していた。「サン＝ジュストは私の夫を大変愛していて、私と離れ離れになると考えただけで夫が悲しみにくれているのに気づいた。彼は私にも好意を持っていて、しょっちゅうちにやって来ていた。私が身重で、ふたたび離れ離れになる悲しみに到底耐えられないのを彼は十分感じ取った。とうとう、ありがたいことに私たちの親切な友人ロベスピエールがサン＝ジュストと話し合い、私と義理の妹アンリエットを一緒に発たせるよう勧めてくれた」。彼も同意したが、ただし条件をつける。行く先の町で誰とも会わぬこと、誰であれ迎え入れないこと、住民たちといっさい社交関係を結ばないこと。もしこれが守られない場合は、ただちにパリへ送り返すというものである。いかにもサン＝ジュストらしい。「私の義妹はまだ十八才だった。経験をつむには私たちはどちらもまだあまりに

若かった。おまけに一度も家族と離れたことがなく、私たちのごくささいな軽率さが引き金となって、サン＝ジュストと夫をどんな危険にさらしかねないか分かっていなかった」。

この旅の途次、彼はおそらくバレールたち公会議員が想像だにしないような顔を見せる。「私たち四人は同じ馬車に乗って旅をした。道すがらサン＝ジュストは私に、これ以上ないような細やかな心遣いと優しい実の兄のような気配りをしてくれた。不慮の出来事を心配して、宿駅ごと何も不足していないか確かめるため馬車を降りるのだった。私があまりに苦しそうにしているのを見て気遣ってくれた。私と義妹にこれほどに親身になり気を配ってくれたおかげで、私たちには旅が長いとは思われなかった。義妹はサン＝ジュストの心遣いにすっかり感じ入って、ただただ感謝の気持ちを示すのだった。暇つぶしに二人の殿方は、私たちにモリエールの芝居やラブレーを何節か読んでくれ、イタリアの歌曲を歌ってくれた。私たちの気を晴らし、私の苦痛を紛らわすために二人は手を尽くしてくれた」。文学を目指した若き日のサン＝ジュストが蘇ったものか。こうして悪路の猛烈な揺れに耐えながらアルザスに入った彼女たちは、前線を避けてサヴェルヌに留まった。ところでこのとき同行したルバの妹アンリエットは、最初のライン軍派遣議員の際、ひとり残す身重のエリザベートを案じてルバが故郷からパリへ呼びよせたのだが、どうやらルバ周辺ではしだいにサン＝ジュストの婚約者という意識が生じていたものらしい。フランス国立古文書館の『ルバ・コレクション』のリストには、ルバの父の手紙が「サン＝ジュストの婚約者だったアンリエット宛て」と記載されている。

九四年一月二二日、サン＝ジュストは再び派遣議員の任務に出発する。行く先は北部軍である。派遣議員の指名はサン＝ジュストひとりであったが、おそらく彼のたっての願いによるものだろう、やはりルバが同行し、エリザベートとアンリエットも行をともにした。ただし今回は、彼女たちは途中フレヴァンのルバの父親の家に留まる。彼らは各都市を時に二手に分かれてまわり、ストラスブールの場合と同様に秩序を確立し、防備を固め、軍の人員、補給路と物資を確保するために奔走するが、厳冬のさ中、共和国の命運をかけた戦いを控えた北方軍が置かれた状況はあまりに悲惨で、サン＝ジュストは一月三一日づけの公安委員会宛ての手紙で脅しに近い調子で早急な改善を迫っている。しかし彼らは急遽パリに呼び戻された。よほど慌しかったらしく、二月一二日パリへの帰還の途次、ルバは父親に宛ててゆっくり別れを告げる暇もなかったことを詫びる手紙を

送っている。サン＝ジュストが任務半ばで呼び戻されたのは、明らかに首都で攻勢を強める左派のエベール派に対処するためである。これ以後、再度北部軍へ出発するまで、サン＝ジュストは息つく暇もなく革命の歯車をまわし続けた。亡命者、「革命の敵」の財産を没収し貧者に再配分することを目的とした「ヴァントーズ法」の提案（二月二六日、三月三日）、エベール派告発（三月一三日）、公安委員会の一員エロー・ド・セシェルの告発（三月一七日）、ダントン派告発（三月三一日）、治安について（四月一五日）。そして四月二九日からは再び北部軍へ。テルミドール一〇日の死を予感したようなサン＝ジュストの「生き急ぎ」ぶりといえよう。

五月二日づけノワイヨンからエリザベート宛ての手紙、今回エリザベートたちは同行していない。「昨日当地に着いた。われわれと別れてサン＝ジュストは母親に、チュイリエは妻に会いに行った。二人ともノワイヨンから遠くないところに住んでいる。彼らは今朝戻った」。二人が向かった先はブレランクールである。チュイリエはサン＝ジュストの年長の幼馴染で、ブレランクールで革命派として彼と行動をともにし、九三年夏よりガトーと同じく軍の糧秣管理官となって、派遣議員のサン＝ジュストに同行していた。テルミドール後チュイリエも投獄されたが、サン＝ジュストに対する虚偽の証言を拒否して獄死した。二人にとってはこれが故郷を見る最後の機会となった。サン＝ジュストは若き日、激しい確執のあったあの気丈な母親と一夜何を語ったのか。ところでこの手紙にはつぎのような条がある。「ぼくらは現在とても良い友達だ、サン＝ジュストとぼくは。問題は何もなかった。われわれはすぐにいつも通り一緒に、行動している。ガトーとチュイリエはぼくらのこの良好な協調ぶりをとても喜んでいるようだ。（…）アンリエットに、もうこれ以上ひどく悲しまないでと頼んで」。それまでとは明らかに違うルバの口調の理由は、その後の手紙で次第に判明する。「ぼくの立場は良好とはいえない。任務につきものの苦労に家庭の心配事が加わっている。（…）サン＝ジュストにはあえてもうアンリエットのことは話題にしない。あれはほんとうに変わった男だ」（五月一四日）「たがいに家庭にかかわる感情のことが話題になるような会話は、サン＝ジュストとはいっさいしていない。こんな気持ちでぼくは孤独だ。ぼくの代わりにアンリエットを抱いてやってくれ」（五月一六日）そして翌日の手紙、「今日アンリエットからサン＝ジュストとぼくに宛てた手紙を受け取った。サン＝ジュストは手紙を開いて読んだ。彼はぼくにほかに何も言わず返してよこした。手紙がぼくだけ

に宛てたものにすぎないかのように」。婚約同然と見られていた二人の間に何が起こったのかは定かでない。アンリエットの喫煙の習慣をサン＝ジュストが嫌ったとも言われるが、確証はない。ルバの手紙にも、エリザベートの手記にも、これを窺わす記述はまったくない。

六月二六日のフルーリュスの戦いでサン＝ジュストの名を「勝利の黙示録」（マルロー）に刻み込むことになる、最後の北部軍への派遣議員（六月一〇日～二九日）にルバは同行していない。ルバとエリザベートとアンリエットの前で見せた二十六才の青年の素顔は再び閉ざされ、「革命は凍りついてしまった。あらゆる原理は弱められている」と『断片』に記したサン＝ジュストは、テルミドールの沈黙と死へと向かうのである。